



Title	第4の統語的複合動詞「終わる」：統語的複合動詞の分類再考
Author(s)	大野，公裕
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 71, 95-110
Issue Date	2018-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68785
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC71_040hno.pdf



第4の統語的複合動詞「終わる」 — 統語的複合動詞の分類再考

大 野 公 裕

1 はじめに一統語的複合動詞の分類

日本語の統語的複合動詞構文は影山（1993）以来、以下の(1)-(3)に示すように、複合動詞(V1-V2)における後部動詞の語彙的性質やその補部構造の違いにより3種類存在すると一般に考えられてきた。(以下、複合動詞における前部動詞をV1、後部動詞をV2と略す。)統語的複合動詞構文はまずV2が上昇(raising)動詞(非対格動詞)(1)かコントロール動詞(2)-(3)かで大きく2つに分かれる。さらに、コントロール動詞は自動詞型(2)と他動詞型(3)に分かれる(影山1993、Koizumi 1995, 2008, 岸本2009, 2013, Kageyama 2016を参照)。

(1) 上昇動詞(非対格動詞)

太郎はピザを作り {出した／すぎた／かけた}。

(2) コントロール動詞：自動詞型

太郎はピザを作り {飽きた／慣れた}。

(3) コントロール動詞：他動詞型

太郎はピザを作り {忘れた／終えた／直した}。

Wurmbrand (2001) は(3)の他動詞型コントロール構文は(2)の自動詞型とは異なり、その補部がPRO主語を持たず、目的語に格を付与しない「再構成」(restructuring)補部であると論じている。そうすると、(1)に分類される上昇動詞の中にも再構成補部をとる構文が存在することが予測される。本稿の目的は、(4)のような文がまさにその予測通りの構文であることを示すことである。

(4) ピザが作り終わった。

以下で論じるように、(4)の文は上昇動詞の「終わる」が再構成補部をとり、補部内の目的語

「ピザ」が主節の時制から主格を付与され、主節主語位置に繰り上がることにより派生される。(4)の構文はこれまでの研究でほとんど取り上げられることがなく、例外的に扱われてきた構文であるが(岸本2005: 52参照)、本稿の分類では何ら新しいメカニズムを導入することなく、統語的複合動詞構文の一つとして自然に説明することが可能になる。このように、本稿の主張が正しければ、統語的複合動詞構文はV2が上昇動詞かコントロール動詞かで2つに分かれ、それぞれがさらに再構成補部をとるかどうかで2つに分かれるので、計4種類の構文が存在することになり、従来分類は見直しが必要になる。

以下では、統語的複合動詞に現れる「終わる」が上昇動詞であり、かつ再構成補部を(随意的にとることによって(4)の構文が派生されることを示す。まず2節では、上昇動詞とコントロール動詞を区別する診断法(diagnostics)を説明し、それに基づき「終わる」が上昇動詞であることを示す。次に3節では、まず(3)の他動詞型コントロール動詞に見られる「長距離受身」(long passive)の主語に対する格付与を考察することで、(3)のコントロール動詞の補部は再構成補部であることを論じ、さらに(4)の構文でも長距離受身と同じ格付与が起きていることから、(4)の「終わる」も再構成補部をとっていると主張する。また、さらなる証拠として、(3)の他動詞型コントロール構文では(1)、(2)の構文とは異なり補部内の目的語のスコープが義務的に主節に限られるが、(4)の構文も同じ特徴を示す。このスコープ解釈は再構成補部をとっている場合に起こることから、(4)の構文が再構成補部をとっていることが支持される。以上のことから、(4)の構文は上昇動詞の「終わる」が再構成補部をとり、補部内の目的語が主節主語位置に繰り上がることにより派生される構文であると結論する。4節は本論のまとめである。

2 上昇動詞としての「終わる」

本節では、統語的複合動詞による上昇構文とコントロール構文の派生と構造上の違いを示し、両構文に対する2つの診断法に基づき「終わる」が上昇動詞であることを論じる。「終わる」に関しては、実は以下のようにこれまでの文献でその分類が一定していない。

(5) 先行研究における「終わる」の分類：

- ・ 上昇動詞とコントロール動詞 (の両方の用法) : Shibatani 1973, 影山1993
- ・ 上昇動詞 : Koizumi 1995, 2008, Kageyama 2016
- ・ コントロール動詞 (自動詞型) : 岸本2005, 2009, 2013

したがって、「終わる」の分類とその分類の根拠を明らかにしておく必要がある¹。

統語的複合動詞構文はV2の性質により大きく上昇構文とコントロール構文に分かれる。(6a)の上昇構文ではV2は非対格動詞として機能しており、その語彙特性により外項をとらないの

で、(6b)のように基底では主節主語位置に外項は現れず、補文主語の「太郎」がその位置へ繰り上がる。一方、(7a, b)のコントロール構文ではV2が外項をとるので、(7c)のように基底で主節主語が現れる。補文主語に関しては、3節で自動詞型とは異なり他動詞型ではPRO主語が存在しないと主張するので、ここではPRO主語を括弧に入れておく。

(6) 上昇動詞：[－外項]

- a. 太郎がピザを作り {出した／すぎた／かけた}。
- b. _____ [太郎が ピザを 作り] {出した／すぎた／かけた}



(7) コントロール動詞：[＋外項]

- a. 太郎がピザを作り {飽きた／慣れた}。(自動詞型)
- b. 太郎がピザを作り {忘れた／終えた}。(他動詞型)
- c. 太郎が [(PRO) ピザを 作り] {飽きた／慣れた／忘れた／終えた}

このような上昇構文とコントロール構文の派生及び構造上の違いに対する証拠として、両構文の診断法がいくつか提案されている。一つは、文イディオムを使ったテストである（岸本 2005, 2009, 2013）。例えば、(8)のように「閑古鳥が鳴く」(＝(店などに) 客が入らない) という文イディオムに上昇動詞またはコントロール動詞を続けると、(8a)の上昇動詞の場合にはイディオムの読みが保たれるが、(8b)のコントロール動詞の場合にはイディオムの読みがなくなり、「カッコウが鳴き飽きた…」などの文字通りの意味でしか解釈されない。

- (8) a. 閑古鳥が鳴き {出した／すぎた／かけた}。(イディオム解釈あり)
- b. 閑古鳥が鳴き {飽きた／忘れた／終えた}。(イディオム解釈なし)

この違いは以下のように説明される。Radford (2009: 242) は「イディオムは単一の構成素でなければならない」というイディオムの成立条件を提案している。この条件に従うと、上昇構文の(8a)は以下の(9a)に示すように、「閑古鳥が鳴き」の連鎖が埋め込み節として単一の構成素を成しているが、コントロール構文の(8b)は(9b)の構造を持ち、ここでは「閑古鳥が (PRO) 鳴き」の連鎖が (PROの有無に関わらず) 単一の構成素を成していない。したがって、(8b)はイディオムとして解釈されないのである。

- (9) a. _____ [閑古鳥が 鳴き] {出した／すぎた／かけた}
- b. 閑古鳥が [(PRO) 鳴き] {飽きた／忘れた／終えた}

このテストを複合動詞の「終わる」に適用してみると、以下のような文イディオムを含んだ例ではイディオムとしての解釈が可能であることから、「終わる」は上昇動詞であると言える²。

- (10) a. やっと [閑古鳥が鳴き] 終わって、みんなホッとしている。
 b. [部長の雷が落ち] 終わるのをじっと待つしかない。
 c. その提案には、すでに [ケチがつき] 終わっている。

二つ目のテストは、V1の直接受身化に関するものである。複合動詞のV1を受身化した場合、(11)の上昇構文では文全体の認知的意味（真理条件）は能動・受動のペアで変わらないが、コントロール構文ではV1の受身化が不可能な場合もあるが、(12)のように可能な場合においては、能動・受動のペアで意味が変わるという違いが出る³。

- (11) a. 太郎が花子を褒め {出した／すぎた}。
 b. =花子が太郎に褒められ {出した／すぎた}。
 (12) a. 太郎が花子を褒め {飽きている／慣れている} (こと)。
 b. ≠花子が太郎に褒められ {飽きている／慣れている} (こと)。

この違いは主節主語への意味役割付与の有無から説明される。まず上昇構文(11a, b)の基底構造はそれぞれ(13a, b)で、その補文は能動・受動で形式は異なるが「太郎が花子を褒める (=花子が太郎に褒められる)」という同じ命題を表している。このあと補文主語は主節主語位置に移動するが、主節主語にはこれ以上意味役割が付与されないため、文全体の意味は変わらない。一方、コントロール構文(12a, b)においてもその補文はそれぞれ(14a, b)に示すように「太郎が花子を褒める (=花子が太郎に褒められる)」という同じ命題を表しているが、主節の動詞が能動・受動でそれぞれ別の主語（「太郎」と「花子」）に意味役割を与えるので、文全体の意味が変わってくるのである。

- (13) a. _____ [太郎が花子を褒め] {出した／すぎた}
 b. _____ [花子が太郎に褒められ] {出した／すぎた}
 (14) a. 太郎が [PRO (=太郎が) 花子を褒め] {飽きている／慣れている}
 b. 花子が [PRO (=花子が) 太郎に褒められ] {飽きている／慣れている}

このテストを以下のように「終わる」に適用してみると、文全体の認知的意味は能動・受動のペアで変わらない。したがって、やはり「終わる」は上昇動詞であることがわかる。

- (15) a. 太郎がすべての餃子を焼き終わった。
 b. =すべての餃子が太郎によって焼かれ終わった。
- (16) a. 学生たちがポスターをすべて貼り終わった。
 b. =学生たちによってポスターがすべて貼られ終わった。

以上、本節では上昇構文とコントロール構文がその後部動詞が外項をとるかどうかどうかという意味役割付与の違いから異なる派生と構造を持つことを示したのち、統語的複合動詞を形成する「終わる」が上昇動詞であることを示した。

3 再構成補部

本節では、1節であげた(3)の他動詞型コントロール構文と(4)の構文（以下に再録）における補部がPRO主語（外項）を持たず、対格を付与しない「再構成」補部であることを論じる。

- (3) 太郎はピザを作り {忘れた／終えた／直した}。
 (4) ピザが作り終わった。

3.1 長距離受身

他動詞型コントロール動詞が再構成補部をとっている根拠の一つは「長距離受身」の可能性である。以下のように、他動詞型(17)では長距離受身、すなわちV2の受身化が可能であるが、自動詞型(18)では不可能である（影山1993, Nishigauchi 1993, 岸本2009, 2013）。

- (17) 他動詞型：長距離受身－可能
 a. 太郎はピザを作り {忘れた／終えた／直した}。
 b. ピザが作り {忘れられた／終えられた／直された}。
- (18) 自動詞型：長距離受身－不可能
 a. 太郎はピザを作り {飽きた／慣れている}。
 b. *ピザが作り {飽きられた／慣れられている}。

以下では、長距離受身の可能性に対する先行研究における説明を批判検討し、他動詞型コントロール動詞(3)が再構成補部をとっていると主張するWurmbrand (2001, 2016)などを支持する議論を行う。そして、(4)の構文も(17b)と同様の派生を持つことから、再構成補部をとっていると考えられることを示す。

まず、長距離受身の可能性に対する説明を提案している影山（1993）と岸本（2013）を検討

する。影山（1993）と岸本（2013）はコントロール構文に対してそれぞれ以下の(19)と(20)の構造を仮定している（ただし主節主語は省略してある）。

(19) 影山（1993）

- a. [_V ピザを 作り] {忘れる／終える／直す}
- b. [_{VP} PRO [_V ピザを 作り]] {飽きる／慣れる}

(20) 岸本（2013）

- a. [_{VP} PRO [_V ピザを 作り]] {忘れる／終える／直す}
- b. [_{VP} PRO [_V ピザを 作り]] {飽きる／慣れる}

影山は、自動詞型(19b)に対しては補文主語のPROを持つ構造を仮定しているが、他動詞型(19a)に対してはPROのない構造を仮定している。この違いにより、V2を受身化した場合、自動詞型ではPROがあるため目的語の主節主語位置への移動が局所性（locality）条件により阻止され、受身化ができないと説明される。それに対して、他動詞型ではPRO主語がないため、受身化による目的語の主節主語位置への移動が可能になる。一方、岸本はPROが目的語の移動を阻止するとは考えず、他動詞型(20a)、自動詞型(20b)ともにその補部はPRO主語を持つと仮定している⁴。そして両者の受身化の違いは単に主節動詞のV2が対格素性を持つかどうかの違いに還元される。受身化が可能なのは対格素性を持つ動詞、すなわち他動詞型の動詞に限られるという説明である。

しかし、岸本の説明には問題点が2つある。第一に理論的な問題点として、日本語では確かにスクランプリングによる移動は他の名詞句を越えることができるが、ここで考慮が必要なのはむしろ目的語への主格付与である。Chomsky(2000)以降の仮定に従って、「一致操作」(Agree)のもとでの格付与が指定部－主要部の関係ではなく、探査子（probe）－目標子（goal）の関係でいわば長距離で行われ、その際に局所性条件、すなわち格付与子から最も近い目標子に格が付与されるという条件に従うと仮定すると、(21)に示すように時制T（Tense）による目的語への主格付与をTにより近いPROが阻止することになる。

(21) _____ [_{VP} PRO [_V ピザが 作り]] 忘れ-られ-た_T (——：格付与)

└──────────┘
 ×

したがって、長距離受身を許す他動詞型コントロール動詞の補部にPRO主語の存在を認める分析には問題がある。

第二に経験的な問題として、他動詞型コントロール構文では補文主語のPROが存在しないことを示す「自分」の束縛に基づく証拠がShimamura and Wurmbrand（2014）によって提出されている。例えば、(22a)の能動文ではカギ括弧で示した補文内の「自分」の先行詞は「太郎」

と解釈できるが、(22b)の長距離受身ではその解釈は不可能である。もし補文内にPRO主語が存在するなら、PROが「自分」の先行詞になるはずである。(22b)が非文法的であることは、長距離受身が可能な他動詞型コントロール構文では補文内にPRO主語は存在しないということを示している⁵。

- (22) a. 太郎_iが [自分_iにテストメールを送り] 直した。
b. *テストメールが太郎_iによって [自分_iに送り] 直された。

以上の理由で、他動詞型コントロール構文の場合は、影山が(19a)で提案するような補文内にPRO主語が存在しない構造が正しいと言える。ただし、影山は補部をVの中間投射としているが、それ以上投射しない範疇は定義上最大投射になるので(Chomsky 1995参照)、補部は中間投射ではありえない。一般に、統語的複合動詞の補部の範疇については、現行のどのような理論を採用するかによって異なり(VP, vP, VoicePなど)、別の考察が必要なので、以下では補部の範疇は特定せずに議論を進める。重要なのは他動詞型コントロール動詞の補部は外項を導入しないという点である。

次に、長距離受身における格付与のメカニズムを改めて考えてみよう。以下の長距離受身(23a)ではV1「閉める」の目的語の「窓」がV2「忘れる」の受身化によってTから主格を付与される。しかし、この格付与は奇妙である。受身化に関する通常の仮定では、受動形態素「られ」は直接結合した動詞、ここではV2の格付与能力を奪うはずである。V1の格付与能力が奪われているわけではないのなら、なぜV1は目的語に対格を付与しないのだろうか。V2が受身化されているにもかかわらず、あたかもV1の目的語の格が奪われているように見える。これはどういうことなのだろうか。

- (23) a. _____ [窓が_i 閉め_{V1}] 忘れ_{V2}-られ-た_T
- |—————|
- b. 太郎は [窓を_i 閉め_{V1}] 忘れ_{V2}-た
- | |

この疑問に対する Wurmbrand (2001, 2016) などにおける答えは、もともと能動文(23b)において目的語に対格を付与しているのはV1ではなく、V2であるというものである。そう考えれば、V2の受身化でV1の目的語の格が奪われることが理解できる。そうすると、他動詞型コントロール構文におけるV1は対格を付与していないと仮定しなければならない⁶。これは、上で見たように他動詞型コントロール動詞の補部は外項を持たないとする、[-外項]⇒[-対格]というブルツィオの一般化(Burzio's generalization)からも予測されることである。

以上をまとめると、他動詞型コントロール動詞の補部は(24)の2つの特徴を持つ。

- (24) a. 外項を導入しない… [－外項]
b. 対格を付与しない… [－対格]

このような補部を Wurmbrand (2001, 2016) などは「再構成」補部と呼び、その統語的特性（一致および格付与、義務的コントロール、フェーズなど）について詳しく論じている。特に(24)の特性がどのようなメカニズムによって可能になるのかが問題となるが⁷、その技術的詳細は以下の議論では関係してこないので、ここでは(24)を再構成補部に対する記述的一般化として捉え、話を進める。

このように長距離受身がV2が再構成補部をとることによって可能になるのであれば、受身化された動詞の代わりに非対格動詞でも同じ派生と格付与が起こることが予想される。実際、(4)の構文がまさにその例であると考えられる。長距離受身と(4)の構文では、それぞれ以下の(25a, b)に示すように、全く同じ派生と格付与が起きていると考えられる。

- (25) a. _____ [ピザが_i作り._{V1}] 忘れ._{v2}-られ-た_T
 ↑ | |
 |_____ | _____|

b. _____ [ピザが_i作り._{V1}] 終わっ._{v2}-た_T
 ↑ | |
 |_____ | _____|

すなわち、(25a)の長距離受身と同じように、(25b)の構文においても補部内の目的語「ピザ」は主節の時制Tから主格を付与されている。このことから、補部のV1は対格を付与していないことがわかる。また、この主格付与が可能であるためには、補部が外項（PRO主語）を持つてはいけないことになる。このように、(25b)における「終わる」は再構成補部をとっていると考えられる。そしてこのあと、(25a, b)のいずれにおいても補部内の目的語「ピザが」は主節主語位置に（随意的に）繰り上がる。以下では、(25a)の長距離受身に対して、(25b)の構文を「長距離上昇」構文と呼ぶことにしよう。

ここで、自動詞型コントロール動詞と上昇動詞の補部は再構成補部ではないことを確認しておこう。以下の(26)のように自動詞型コントロール動詞は対格を付与しないので、(27)において補部内の目的語に対格を付与しているのはV1であることがわかる。すると、ブルツィオの一般化により[+対格]⇒[+外項]が成り立つので、補部はPRO主語を持つと言える。つまり、自動詞型コントロール動詞は通常の動詞句補部、「非再構成補部」をとっている。また、上昇動詞の補部も(28)のように主語が現れ、目的語はV1によって格を付与されるので、非再構成補部である。

- (26) a. 太郎はその仕事 {に/*を} 飽きた。

b. 花子はその仕事 {に／*を} 慣れた。

(27) 太郎_iは [PRO_i ピザを 作り_{v1}] {飽きた／慣れている}。
└──┘

(28) _____ [太郎が ピザを 作り_{v1}] {出した／すぎた／かけた}。
└──┘

3.2 数量詞（焦点要素）のスコープ

以下では、他動詞型コントロール動詞が再構成補部をとっているさらなる証拠を提示する。他動詞型コントロール構文を他の複合動詞構文（上昇および自動詞型コントロール構文）と区別するもう一つの特徴は、数量詞や焦点表現のスコープの違いである。Koizumi (1995, 2008) が指摘しているように、補部内の目的語が数量詞や「だけ」などの焦点要素を伴った場合、上昇構文(29)と自動詞型コントロール構文(30)では目的語のスコープはあいまいで、主節(a)または補部(b)をスコープにとることができる。(括弧内はそれぞれの読みのパラフレーズである。) 一方、他動詞型コントロール構文(31)では目的語のスコープは主節(a)に限られ、補部(b)の可能性はない。つまり目的語は主節動詞の「忘れる」よりも広いスコープをとる読みしかない。

(29) 上昇動詞（非再構成補部）

太郎はサラダだけを食べすぎた。

a. だけ > すぎる (= 太郎が食べすぎたのはサラダだけだ)

b. すぎる > だけ (= 太郎がしすぎたのはサラダだけを食べることだ)

(30) コントロール動詞：自動詞型（非再構成補部）

太郎はサラダだけを食べ飽きた。

a. だけ > 飽きる (= 太郎が食べ飽きたのはサラダだけだ)

b. 飽きる > だけ (= 太郎が飽きたのはサラダだけを食べることだ)

(31) コントロール動詞：他動詞型（再構成補部）

太郎はサラダだけを食べ忘れた。

a. だけ > 忘れる (= 太郎が食べ忘れたのはサラダだけだ)

b. *忘れる > だけ (= 太郎が忘れたのはサラダだけを食べることだ)

ここで注意が必要なのは、このスコープの違いが主節の動詞(V2)で決まるわけではないということである。(32a)の「閉め忘れる」という通常の複合動詞形に対して、(32b)のように「忘れる」の補部を「～するのを」という名詞句にすると、「だけ」のスコープが補部内に留まる読みが可能になるからである。すなわち、(32a)ではすべての窓が開いたままという意味しかないが、(32b)は一部の窓が閉まっている場合でも真となる（読みがある）。このことはスコ

ープの解釈に補部の内部構造が関係していることを示している。

- (32) a. 太郎はすべての窓を閉め忘れた。(すべて>忘れる、*忘れる>すべて)
 b. 太郎はすべての窓を閉めるのを忘れた。(すべて>忘れる、忘れる>すべて)

そこで本稿では、(29)–(31)におけるスコープ解釈の違いに対する説明として、Shimamura and Wurmbbrand (2014), Wurmbbrand (2016) に従って、Heim and Kratzer (1998) の分析を採用する。すなわち、数量詞は数量詞繰り上げ (Quantifier Raising, QR) によってそのスコープが決まるが、動詞句は命題を表す場合のみQRのターゲットになると仮定する。そうすると、再構成補部は主語 (外項) がないので命題としては見なされないため、QRのターゲットにならない。したがって、再構成補部内の数量詞や焦点要素は補部ではなく、主節をスコープにとることになる。一方、非再構成補部は主語 (外項) があるので命題としてQRのターゲットになる。したがって、非再構成補部を持つ複合動詞構文ではスコープがあいまいになるのである⁸。

以上、複合動詞構文における数量詞 (焦点要素) のスコープ解釈から他動詞型コントロール動詞が再構成補部をとっていることを示した。

3.3 スコープ解釈からの証拠

最後に、長距離上昇動詞の「終わる」が再構成補部をとっているさらなる証拠として、この構文における目的語のスコープ解釈が再構成補部をとる他動詞型コントロール動詞と同じパターンを示すということを見ておこう。

以下では、上昇動詞の「終わる」、他動詞型コントロール動詞の「終える」、長距離上昇動詞の「終わる」を比較する。例えば、(33)に示すように太郎が大人数のパーティーの準備でピザと餃子を焼いたという状況を想定してみよう⁹。焼いた時間はピザは1時から3時まで、餃子は2時から4時までである。

- (33) 【状況】 太郎は大人数のパーティーの準備でピザと餃子を焼いた。

	1 時	2 時	3 時	4 時
ピザ	-----			
餃子		-----		

この状況では、以下の(34)–(36)の文における目的語「ピザだけ」のスコープは(a)文では主節の読み (「だけ>V2」) に限られ、(b)文では補部の読み (「V2>だけ」) に限られる。(括弧内はそれぞれの読みのパラフレーズである。)

(34) 上昇動詞「終わる」(非再構成補部)

- a. 3時に太郎はピザだけを焼き終わった。
「だけ>終わる」(= 3時に焼き終わったのはピザだけだ)
- b. 2時に太郎はピザだけを焼き終わった。
「終わる>だけ」(= ピザだけを焼くのが2時に終わった)

(35) 他動詞型コントロール動詞「終える」(再構成補部)

- a. 3時に太郎はピザだけを焼き終えた。
「だけ>終える」(= 3時に焼き終えたのはピザだけだ)
- b. 2時に太郎はピザだけを焼き終えた。
「*終える>だけ」(= ピザだけを焼くのを2時に終えた)

(36) 長距離上昇動詞「終わる」

- a. 3時にピザだけが焼き終わった。
「だけ>終わる」(= 3時に焼き終わったのはピザだけだ)
- b. 2時にピザだけが焼き終わった。
「*終わる>だけ」(= ピザだけを焼くのが2時に終わった)

すでに見たように、上昇動詞の「終わる」は非再構成補部をとっているので、目的語のスコープは主節と補部の両方が可能である。確かに(34a, b)の文は両方ともこの状況で使うことができる。それに対し、他動詞型コントロール動詞の「終える」は再構成補部をとっているので、目的語のスコープは主節に限られる。確かに、(35a)は問題ないが、(35b)の文はこの状況では使えない。そして長距離上昇動詞の「終わる」だが、「終える」の場合と同じように、(36a)は問題ないが、(36b)の文はこの状況では使えない。このことから、長距離上昇動詞の「終わる」は、他動詞型コントロール動詞の「終える」と同様、再構成補部をとっていると結論できる。

4 まとめ

本稿の分析結果をまとめると、まず、統語的複合動詞は以下の表のように後部動詞が外項をとるかということと再構成補部をとるかということの2つの特性の有無により4種類に分類される。

(37) 4種類の統語的複合動詞

	上昇動詞：[−外項]	コントロール動詞：[+外項]
非再構成補部	すぎる、かける、終わる、etc.	飽きる、慣れる、etc.
再構成補部	終わる ¹⁰	終える、忘れる、直す、etc.

また、それぞれの構文の派生と目的語の格付与を改めて以下に示す。

- (38) a. コントロール動詞 ([+外項]): 非再構成補部
 太郎_iが [PRO_i ピザを 作り_{V1}] 飽きた_{V2}
 ــ
 b. コントロール動詞 ([+外項]): 再構成補部
 太郎が [ピザを 作り_{V1}] 終えた_{V2}
 ــ
 c. 上昇動詞 ([-外項]): 非再構成補部
 ــــــــــــــــ [太郎が ピザを 作り_{V1}] すぎた_{V2}
 ــــــــــــــــ
 d. 上昇動詞 ([-外項]): 再構成補部 – “長距離上昇”動詞
 ــــــــــــــــ [ピザが 作り_{V1}] 終わっ_{V2} た_T
 ــــــــــــــــ

本稿の主張は、もし正しければ、従来の3種類の分類に見直しを迫る結論である。特に、コントロール動詞が自動詞か他動詞かという違いは構文の区別には関係なく、その補部が再構成補部（外項を導入せず、対格を付与しない）かどうかという補部の性質が関係していることを示唆する。例えば、従来の分類では、コントロール動詞が他動詞（[+対格]）であれば、長距離受身が可能であり（岸本2013参照）、数量詞のスコープは主節に限られる（注8のKoizumi 2008の分析を参照）と予測するが、本稿の分類では、たとえ他動詞であっても非再構成補部をとっているとしたら、長距離受身は不可能で、スコープは主節と補部の両方が可能であると予測する。これらの予測の検証を含め、本稿で提案した分類のさらなる検討は今後の課題としたい。

注

- * 本稿の内容の一部は、言語学ワークショップ『東アジア言語の複合述語をめぐって』（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、2017年2月）、日本言語学会第155回大会（立命館大学、2017年11月）での発表に基づいている。両発表会の参加者から貴重なコメントをいただいた。また、二人の査読者からは有益な質問や示唆をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。
- 1) 以下では「終わる」が上昇動詞であることを論じるが、Shibatani (1973)、影山 (1993) の分類におけるようにコントロール動詞の用法もあるかということについては、コントロール動詞の診断法を含めた別の論考が必要になるので、ここでは議論しない。また、岸本だけが「終わる」を上昇動詞として認めていないことについては、注2の議論を参照。
- 2) 岸本 (2005: 50, 2009: 181, 2013: 148) は(10a)と同じ文イディオムを含む以下の(i)の例がイディオム解釈を持たないと判断し、この例を「終わる」が上昇動詞ではなく、コントロール動詞であることの根拠の一つとしている。また、別の根拠として「終わる」が(ii)のように無生物主語を許さないことをあげている。コントロール動詞は「雨が降り出した」における「出す」のような上昇動詞とは異なり、一般に無生物主

語を許さない。

- (i) この店で (は) 閑古鳥が鳴き終わった。
- (ii) a. ?*風が木の葉を揺らし終わった。(岸本2005: 51)
- b. *雨が降り終わった。(岸本2009: 181)
- c. *そよ風が吹き終わった。(岸本2013: 150)

しかし、Kageyama(2016: 288)は無生物主語を持つ(iii)の容認可能な例をあげ、「終わる」は上昇動詞だが、(iv)の制限が課されると述べている。

- (iii) 砂時計の砂が落ち終わった。
- (iv) 「終わる」の補部が表す出来事は、あらかじめ決まった終点 (predetermined endpoint) を持たなければならない。

つまり、砂時計の砂がいずれ落ち終わることは、砂の量が決まっているので、あらかじめ予想される。それに対して(ii)の場合は、補部が表す出来事の終点は、通常あらかじめ予想されない。本稿でも「終わる」は上昇動詞で、その補部に(iv)の制限が課されると考える。そうすると本文の(10)のイディオムの例も、カギ括弧内のイディオムが表す出来事が終点を持つことが文脈から推測できるので、そのような文脈のない(i)に比べ、容認可能性が高くなると考えられる。

- 3) このテストは、英語では(i)-(ii)のような例をあげることができるが、1960年代からよく知られているものである (Chomsky 1965: 22-23, Rosenbaum 1967: 59-61参照)。(i)と(ii)の両方の構文において主節動詞の補文が受身化されているが、(i)の上昇構文では受身化されても文全体の(認知的)意味は変わらないが、(ii)のコントロール構文では意味が変わる。

- (i) 上昇構文
 - a. Barnett seems to have read the book.
 - b. = The book seems to have been read by Barnett.
- (ii) コントロール構文
 - a. The doctor tried to examine Tilman.
 - b. ≠ Tilman tried to be examined by the doctor.

(Davies and Dubinsky 2004: 5)

また、アスペクト動詞の上昇動詞用法に関しては、Perlmutter (1970: 109) が(iii)の英語の例を、Shibatani (1973: 85) が(iv)の日本語の例をあげている。これらの例において(a)と(b)は同義である。

- (iii) a. The noise began to annoy Joe.
- b. Joe began to be annoyed by the noise.
- (iv) a. 暴徒は店のガラスを割り {始めた／続けた}。
- b. 店のガラスは暴徒に割られ {始めた／続けた}。

- 4) Nishigauchi (1993) も岸本 (2013) と同様に補部内にPROがある構造を仮定している。
- 5) PROが存在しないとすると、義務的コントロールがどう説明されるかという問題が生じる。この問題については、Shimamura and Wurmbrand (2014) や Wurmbrand (2016) で論じられているが、ここでは扱わない。
- 6) 影山 (1993) は長距離受身における格付与については議論していない。また、長距離受身が可能であるためには、V2がV1の目的語に意味役割を付与しなければならないと仮定しているが、本稿ではそのような仮定は取らない。
- 7) 例えばWurmbrand (2001) は、通常の動詞句補部は(ia)のようにvPであり (Chomsky 1995)、再構成補部は(ib)のようにvの投射を持たないVPであると仮定している。そうすると、vが外項を導入し、対格を付与するので、vの投射を持たない再構成補部は必然的に(24)の2つの特徴を持つことになる。また、これに代わる最近の提案としてはWurmbrand (2016), Wurmbrand & Shimamura (2017) を参照。

- (i) a. [_{VP} PRO [_{VP} ピザを 作り] v] {飽きる／慣れる}
- b. [_{VP} ピザを 作り] {忘れる／終える／直す}

Chomsky (1995) 以降のミニマリスト・プログラムの枠組みでは、対格は動詞Vではなく機能範疇のv (またはVoice) によって付与されるが、以下では引き続き、説明の便宜上あたかも動詞が対格を付与するとい

う言い方で議論を進める。

- 8) (29)–(31)の事実に対して、Koizumi (2008) は目的語の格の認可が補部内で起こるか主節で起こるか（すなわち、格付与子が補部内にあるか主節にあるか）によってそのスコープが決まるという説明の可能性を示唆している。つまり、V2=[+対格]（他動詞型コントロール動詞）の場合は目的語の格は補部ではなく主節で認可されるので、スコープは主節に限られ、V2=[−対格]（上昇動詞と自動詞型コントロール動詞）の場合は目的語の格は補部で認可されるので、補部がスコープになりうるという説明である（この場合、目的語のスコープが主節である読みは、Koizumi (1995) におけるように、何らかの移動規則（スクランプリングや焦点移動）によってもたらされると仮定することになる）。しかし、Shimamura and Wurmbrand (2014) は、補部内の付加詞もまた目的語と同じスコープのパターンを示すことから、目的語の格の認可とスコープは関係がないと主張している。本稿もこの主張に従っている。
- 9) このような状況を想定してスコープの可能性を判定する方法はKoizumi (1995) に倣ったものである。
- 10) 再構成補部をとる上昇動詞としては、筆者の知る限り「終わる」しかないようである。ある査読者から(i)の例が示唆されたが、ここでの「すぎ(だ)」「かけ(だ)」は動詞ではなく、叙述名詞（predicate nominal）である。(ii)に示すように、動詞としての用法はないと思われる。
 - (i) a. ピザが作りすぎなので…。
 - b. ピザが作りかけだ。
 - (ii) a. ?*ピザが作りすぎた（ので、友達に食べてもらった）。
 - b. *ピザが作りかけた。

一般に、動詞による補部の選択は個々の動詞の特異的な（idiosyncratic）性質によるので、「終わる」は他の上昇動詞とは異なり、それ自体の選択特性として主語を持たない再構成補部をとることができるのかもしれない。

【参考文献】

- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Davies, William D. and Stanley Dubinsky. 2004. *The grammar of Raising and Control*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Heim, Irene and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in generative grammar*. Oxford: Blackwell Publishers.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- Kageyama, Taro. 2016. Verb-compounding and verb-incorporation. In *Handbook of Japanese lexicon and word formation*, ed. by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto, 273–310. Berlin: Walter de Gruyter.
- 岸本秀樹. 2005. 『統語構造と文法関係』東京：くろしお出版.
- 岸本秀樹. 2009. 「補文をとる動詞と形容詞－上昇とコントロール」影山太郎（編）『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』152–190. 東京：大修館書店.
- 岸本秀樹. 2013. 「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』143–183. 東京：ひつじ書房.
- Koizumi, Masatoshi. 1995. Phrase structure in minimalist syntax. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Koizumi, Masatoshi. 2008. Nominative object. In *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 141–164. Oxford: Oxford University Press.
- Nishigauchi, Taisuke. 1993. Long distance passive. In *Japanese syntax in comparative grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 79–114. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Perlmutter, David M. 1970. The two verbs *begin*. In *Readings in English transformational grammar*, ed. by

- Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 107–119. Waltham, Mass.: Ginn.
- Radford, Andrew. 2009. *Analysing English sentences: A minimalist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosenbaum, Peter S. 1967. *The grammar of English predicate complement constructions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1973. Where morphology and syntax clash: A case in Japanese aspectual verbs. 『言語研究』 64: 65–96.
- Shimamura, Koji and Susi Wurmbrand. 2014. Two types of restructuring in Japanese—Evidence from scope and binding. In *7th Formal approaches to Japanese linguistics*, 203–214. MITWPL, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
- Wurmbrand, Susanne. 2001. *Infinitives: Restructuring and clause structure*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Wurmbrand, Susanne. 2016. Complex predicate formation via voice incorporation. In *Approaches to complex predicates*, ed. by Léa Nash and Pollet Samvelian, 248–290. Leiden: Brill.
- Wurmbrand, Susi and Koji Shimamura. 2017. The features of the voice domain: actives, passives, and restructuring. In *The verbal domain*, ed. by Roberta D'Alessandro, Irene Franco, and Ángel J. Gallego, 179–204. Oxford: Oxford University Press.

(2017年11月9日提出、2018年1月28日受理)

《SUMMARY》

The Fourth Type of Syntactic Compound Verb *Owaru*
– Rethinking the Classification of Syntactic Compound Verbs
in Japanese

Kimihiro OHNO

Since Kageyama (1993) the syntactic compound verbs in Japanese have been classified into three types; raising, intransitive control, and transitive control verbs. In this paper I argue that there is a fourth type of syntactic compound verb in Japanese, *-owar* ‘come to an end’, as in (1) .

- (1) Piza-ga tukuri-owat-ta.
pizza-NOM make-come to an end-PAST
‘One finished making pizza.’

Specifically, I show that *-owar* in (1) is a raising (unaccusative) verb taking a “restructuring” complement in the sense of Wurmbrand (2001, 2016) . If so, the embedded object ‘pizza’ is assigned no Case by the embedded nor the matrix verb, and only assigned nominative Case by the matrix Tense, which results in the construction in (1).

First I establish the status of *-owar* as a raising verb on the basis of two diagnostics for raising verb. Next I examine the details of the nominative Case assignment to the object in long passive, which has been shown to involve a restructuring complement, and argue that the same nominative Case assignment occurs in (1). This can be taken as evidence that *-owar* in (1) is also taking a restructuring complement. As further evidence, I point out that the scope of the embedded object (the surface subject) in (1) is the same as that of the object in restructuring complement. This also supports the conclusion that *-owar* in (1) is taking a restructuring complement.